

【説明の流れ】

皆さんと少しでもコミュニケーションを取り、一方通行の話にならないようにしたいため、お手元にという思いで配付させていただきました。まず、私からの投げかけですが、実は前年度の1月24日に町民会館で対話集会を開きました。そのときの資料と若干重なる内容ですので、どのように展開していくのがよいかを題材にしたいので、○×でお答えいただきたいです。1月24日参加された方は○、不参加だった方は×を挙げていただいてよろしいでしょうか。ありがとうございます。参加された方もいらっしゃると思いますが、ほとんど24日には来られなかったということで、改めて、この大事なことを資料を基に話しをさせていただきます。

【1. 富士川町が消滅するかもしれない?!】

それでは、「持続可能なまちを目指して」ということで、富士川町は持続可能なまちではないのかという疑問が出てくると思いますが、実は持続させるには非常にたくさんのハードルを越えなければいけない状況にあります。この状況を皆さんに伝えなければいけないと思い、題材にさせていただきました。

市川三郷町が財政非常事態宣言を出したこと、富士川町も同じような状況だということを、まずは前提として話をしたいと思います。実際は広報等で掲載している情報ですが、それをまとめてお話しすることによって様々なものが繋がってくるのではないかと思います、お話しをさせていただきます。

【P2】

それではまず、若年女性人口の減少率が50%以上の自治体を消滅可能性自治体ということで、富士川町が消滅するのではないかとこの予測が立てられています。

この消滅可能性自治体という定義なんですが、これは2020年から2050年の30年間で20歳から39歳の女性人口の減少率が50%を超える自治体は消滅可能性自治体ということで、今回、人口戦略会議『地方自治体の持続可能性分析レポート』で、改めて出されました。実は10年前にも同じようなレポートが出され、それにも富士川町は消滅可能性自治体として挙げられていました。そして、今回も同じように消滅可能性自治体ということで発表されました。

ここで、この消滅可能性自治体という言葉、富士川町が消滅可能性自治体ということで聞いたことがある方は○、聞いたことがなかった方は×を上げていただいてよろしいでしょうか。ありがとうございます。聞いたことがあった方もいらっしゃると思いますが、過半数は初めて聞いたということで、改めて富士川町は消滅可能性自治体だということで認識をしていただければと思っております。

【P3】

この消滅可能性自治体の右側の緑の山梨県地図のところ、27市町村のうち11市町村が消滅可能性自治体ということで、レポートから発表がありました。

日本創生会議、増田レポートということで聞いたことありますでしょうか。増田寛也さんという総務大臣や郵政のトップを担っている方が座長を務めており、ほぼ国の諮問機関的な形で発表したものです。

【P4】

そのときも富士川町は、消滅可能性自治体ということでしたが、10年以上経って、富士吉田市、山梨市、北杜市、山中湖村、市川三郷町、小菅村、丹波山村、この赤字の市町村は脱却しています。

富士川町はまだ消滅可能性自治体ということで指定されております。大体全国の4割が、消滅するだろうという予測をされていまして、富士川町がその中に入っているという状況です。1729自治体中744自治体ということで、指定されています。10年前は896自治体ということで若干減ってきてはいるのですが、まだまだ日本全体が少子高齢化、様々な事情の中で消滅可能性自治体から脱却されておらず、警鐘を鳴らしています。私もいろいろと調べました。どのような自治体が消滅可能性自治体でなくなっているのかを調査したところ、北海道で6割の自治体が設置主体だと言われています。

その他はやはり厳しいのです。少子高齢化が非常に厳しく、地域経済がすごく疲弊しているところですが、上士幌町がここから脱却しています。

では、何をして消滅可能性自治体から脱却したのか。

まず一つは英語を学べる環境や学力の向上。子供たちの学力の向上をさせるような環境を作ったということです。次にこども園の無償化、子育て支援です。そして、移住体験施設。お試し移住ということで、地域に興味を持った方が試しにそこで移住をし、うまくいけばその地域の空き家や新築を建てて移住してもらうという体験を作りました。最後は、住んでもらうだけでなく、起業家支援、そこで生業を起こしてもらう支援をしたということで人口減少が食い止められました。

そして、他にも脱却している自治体があります。それは宮城県の大衡村という小さな村です。

東北地方では、ほとんど自立可能性自治体ではなく消滅可能性自治体となっているのですが、東北地方で唯一脱却しています。市や町ではなく、富士川町よりも人口規模の小さい自治体ですが、子育て支援と企業誘致を集中して行い、これもまた移住促進という部分で、子育て、働く場所、住む場所に力を入れてやっていました。

次にご紹介するのが島根県邑南町です。こども子育て支援の町ということで、ビジョンを掲げて脱却しています。人口1万人程度のうちの町の小さな町なんですが、人口を少しでも減らさないようにということで、キープする様々な政策をその人口減少に集中して行っています。

邑南町が力を入れたところは、各区の自立です。町主導ではなく、それぞれの各区が地区別戦略を作って、地域の特性を活かし自立するよう仕掛けました。邑南町では12の公民館があり、各区が自立できるように地域の特性を活かし、昔の村のように機能するよう仕掛けた。要は、町が全体的なものをコントロールするのではなく、各地域がコントロールしたことで脱却しています。

最後の事例が岡山県美咲町です。ここは賢く収縮するまち作りと子育て支援を両立するということに力を入れました。人口減少のデータは右肩下がりで下がっていく一方で、しっかりと正面から捉えて賢く全体の範囲を小さくしようという計画を立てました。この予測値どおりにやっっていくこと。それにプラス子育て支援に力を入れ、消滅可能性自治体から脱却したということです。

私が今、子育て支援で、まずは人に投資しようということで仕掛けています。教育や子育てです。箱物は抑えながらできるだけ人に投資するような政策を、また地域が活性化するような政策をしております。農村RMOはこれも首都圏で富士川町が第1号で、農林水産省から指定を受け、展開しています。農村RMOの団体を作って、1年間1,000万円、3年で3,000万円という、交付金をとおして、持続可能な地域にするためにいろいろ政策を地域で考えていただいて、先ほどの事例に沿って動いていただくということです。この地域は、農楽里倶楽部が動いていくと思います。ぜひ皆さん参加していただいて、持続可能な地域を作っていただければと思います。

【P5】

次のページの富士川町人口を見てください。右肩下がりに下がっています。2000年くらいを境に徐々に徐々に人口減少が進んでいきます。全国の趨勢と全く一緒です。かなり町もいろいろな政策を展開して、子育て支援などこれまでもやってきました。やはり努力してもこの統計学といいますが、予測だと思っています。ほぼこれと同じようなデータで落ちているということです。ですから、このまま何もしなければ同じように落ちていきます。2050年には8617人ということで、今の半分ぐらいの規模になってしまうということです。

【P6】

富士川町を消滅させない持続可能なまちとするためにどうしたらよいか考えました。

人口減少というのを食い止めるために様々な施策が必要です。そして箱物に投資するのではなくて、今言ったようにソフト面に投資をする。そのためにはどうしても財源が必要です。お金が必要になります。これから説明しますが、富士川町は本当にお金がなくかなり厳しい状況です。

その中で子育て支援、もしくは人に投資する高齢者福祉をこれからやっていきたいと思いますが、そういったものに投資をするためにもやはり財源が必要です。富士川町は一体どんな財政状況なのかということを就任当初紐解いてみました。この情報を皆さんに伝えたくて、こうやって各地を歩き昨年対話集会をさせていただいています。

【P7】

まず、町の基金の推移ということで、平成30年ぐらいから基金を取り崩して、徐々に基金が減ってきています。要は、それまで町の基金を取り崩すこともありましたが、ちゃんとその分が返ってきていたのです。積み上げられていた。しかし、どんどん基金を取り崩してやらないと、町の事業が回らなくなってくる。そういう状況が続いている

のです。家計で言えば、貯金をどんどん切り崩して毎年生活している状況が平成 30 年から続いていたということです。広報などで公表をしていますが、単年度のものしか出していません。全体的なものを出していないので、棒グラフを見ても皆さんわからないですよ、やっぱりどうしても町の会計は単年でやるんですけど、これは長期的なものでしっかりと考えていかなきゃいけない、そのためにグラフを出しました。

これを見ていただければ、このままの調子で同じようなことをやっていけば、基金はなくなってしまう。貯金がなくなってしまう。予算を組むこともできなくなる。賢く収縮するまち作りをやはりやっていかなくてはいけないと思っています。

【P8】

この一番の根本は 7 大事業ということで、118 億円。ただこの事業が、全部悪いというわけではありません。合併して新しいまち作りをするために、合併推進債を使って有利な財源の中で将来的にまち作りの基盤を作っていく、この考えの全部は否定することはできないのですが、どうしても短期的にやりすぎもあると思うのです。

でもそのときの判断は戻ってはいけませんし、そこを批判しても仕方がないのですが、現実を皆さんにお話したいと思います。この 7 大事業の償還という部分、お金を返す部分は 5 年据え置きです。

ですから、庁舎の償還はまだ始まっていない。グラウンド、児童館、図書館、給食センター、そして役場庁舎ということで、ここの 7 大事業のうちの 5 つ、側道の方はこれから話をしますが、償還がまだ始まっていないものがあります。だんだん償還が始まってきて、これがどんどん重なって、この赤い部分が 7 大事業の借金の返済の部分になってきます。世代間の公平な負担なのですが、いかんせんここでぱっとやりすぎたと思います。ですから町民体育館は財政が厳しいので、もう 1 度リセットして先送りをしようと今調整をしているところです。

後ほどお話しますが、一番厳しいピークが令和 11 年です。このピークを外して、町民体育館の対応をするということで、役場内で議論をしているところです。

【P9】

こういう状況を見て、将来的に財政シミュレーションっていうのをしっかりとやってくれと、令和 4 年度に指示を出しました。財政シミュレーション行政の財政手法をいくつかあるのですが、その中で将来負担比率というところをちょっとわかりやすく、クローズアップして話をします。

将来負担比率というのは、今の財政規模に対して将来的に返さなければならない借金の額の規模です。家計でいいますと、自分の家計の収入と家のローン、住宅ローン、教育車のローン、様々なローンで将来の比率を、返さなくてはならない借金の額の比率のことを指します。自分たちの家計の規模とその借金の比率部分をざっくりとイメージしていただければと思います。この将来負担比率を頭に置きながら次の話をします。

【P10】

では、現時点で町の貯金はどのくらいあるのか。山梨県の自治体の中で、何番目に位置しているのか。現時点で財政規模に対する貯金残高の割合は、27市町村中、県内ワースト2位です。人口減少のフェーズに入って2000年以降でそれぞれの自治体が予測しながら、財政を健全化していこうということで、お隣の身延町は基金を積み上げて貯金をし、あまり派手なことはしませんでした。

【P11】

しかし富士川町は町の財政がこういった状況で、町の借金が出てきて将来負担比率がこれから上がっていくと、25位です。27市町村中下から3番目、他の自治体は健全化していくので、だんだん右肩下がりになっていく。

富士川町は今25位ですが、今後間違いなく県内で一番になります。令和11年将来負担比率が今この時点で61.7で、これが166.8という数字になります。166.8っていうと想像がつかないと思いますが、去年のデータの時点で全国ランキング全国で約15位です。全国のトップは夕張市です。

富士川町が全国ランキングに入ってくるような状況になる財政シミュレーションが出てきました。確かに富士川町は大きな事業を行っていません。私が就任してから行ってない。行うことができない。行う必要もない。これまで合併して、これまでの事業でスクラップアンドビルドを行ってきたので、行う必要もないのですが、この困った状況の中で何の事業もできないなんて、もう完全に使えるものを使い切った。

【P12】

何とかして皆さんの住民サービス、もしくは様々な事業を少しでも行いたいということで、目をつけたのがふるさと納税です。

【P13】

短期的な新規事業ですが、町の収入を増やすため、ふじかわまちづくり公社という株式会社を設立しました。そして、就任した頃は8,000万円のふるさと納税が1億円程度でした。まちづくり公社を作り、ふるさと納税に力を入れました。

25万円の資本金で株式会社作ったんですが、力を入れたところ2.5億円、2.7億円、で3億円と、徐々に右肩上がりです。富士川町のふるさと納税が上がってきています。

【P14】

またふるさと納税とは別に、企業版ふるさと納税というものがあります。企業には返礼品はありません。

しかし、企業は地域貢献ということで、納税国に納税するのではなく富士川町に納税してもらおうという税制の優遇措置があります。この制度をうまく活用し、営業活動を私もしました。職員がかなり一生懸命頑張ってくれていろいろな段取りをしてくれました。

そして富士川町外の事業所、企業でないと納税ができません。そこで首都圏富士川会の力を借りました。首都圏富士川会を皆さんは聞いたことがありますか。山梨県人会の中で最大勢力です。山梨県人会の要職は、ほぼ首都圏富士川会になってるようなイメージです。何が言いたいかというと、この地域から出た人たちがこのふるさとを思っていたいて、そのふるさとのために動いていた、見えない地域力。これまでかつて先人が達成してきてくれた私達の心の繋がり、うちの富士川町の各旧町増穂、鯉沢を何とかしなきゃいけないという気持ちの中で、営業活動でいろいろ動いていたいて、集まっていたお金が企業版ふるさと納税です。そしてこれが、全国で36番目、税額2億2350万円です。

山梨県ではダントツNo.1、山梨県よりも企業版ふるさと納税で富士川町が前年度は稼ぎました。山梨県もびっくりしたと思います。やはりふるさとを思う気持ちの部分が、全て繋がって税金につながった。企業も富士川町の子育て支援に使ってくださいとか、富士川町の町民のために使ってくださいというメニューを出すことによって、それをホームページにかけののです。そうすると企業のイメージアップにもなります。

【P15】

ということで、これまで富士川町の財政状況とふるさと納税に力を入れて、新しく財源を求めようと取り組みを始めたばかり。それと先ほどの事例を紐解いて、農村RMOなど地域に活力を出すために地域にしっかり資金を投入しています。農村RMOは、首都圏で富士川町だけなので、何とか政治力を使って持ってきました。

これまで町の財政状況、そしてこんな状況だったことを知っていた人○、知らなかった人は×で挙げてください。この内容は広報で出していますが、全体的なスキームを話したのは、こういった場が初めてです。

町の財政状況がこんなに厳しかったのかと知ってる方もいますし、知らなかった方もいますね。半分以上は知らなかったですね。ここで、反転攻勢を仕掛け始めています。何とかしなきゃいけない。機運を高めていくために、このいただいたふるさと納税を活用してプロジェクトを遂行しよう、ただ納税が入ってきて事業を展開したら、望月町長は我々の税金を使って、事業をやっているじゃないかと、こういう批判を皆さんから多くいただきました。そうではなくて、『ゼロプロジェクト』ということで、いただいたお金だけで展開しています。皆さんからの税金は一切手つけていません。このようなネーミングを付けることによって、地域の皆さんに分かってもらう。普通これまでは、一般財源を使って、国県の補助金を使って事業をやって、町の事業を国や県そして地元のお金を入れて自分たちの事業をやる、これが今までの手法で当たり前の手法です。

でもそうではなくて、国県、寄付を使って、町のお金は使わないということで事業を展開しているのが、ゼロプロジェクトです。いただいてきたお金だけでやっているということです。新しい事業として事業モデルとして、いろいろと財政担当や副町長とも相談しながら、こういう事業モデルでできるのではないかとということで展開しています。

河川敷に作ったドッグランもゼロプロジェクトです。皆さんからの税金を一切使っておりません。そして保育料無償化です。これは富士川町の子育てのために使ってくれという企業のお金を持ってきて、保育料を無償化させていただきます。

そしてふるさと実施活動応援交付金。これは200万円をある企業から富士川町のために使ってくださいということでした。それを各15区に分散し、渡し切りで自由に使ってください、ということでお渡ししました。前年度はできなかったんですが、4年度はできました。なかなかふるさと納税の具合でいつももらえるとは限らず、なかなかできないことですがこれもやりました。

そして在宅育児応援給付金、これはオムツ代です。お母さん方には、家で子育てする中でやはり少しでも支援したいということで月2,000円のおむつ代を渡すというお金です。これも皆さんからの税金ではなく、ふるさと納税で行っています。

【P16】

結果、財政シミュレーションが61.7、何もしなければ90.2の予測だったのが、61.7ということで何とか抑えることができた。右肩上がりの上昇を抑えることができました。

【P17】

次は、人口減少をどう食い止めるのか、先ほどの事例のとおり人に投資していく、まずは子育て支援だということで行いました。

資料の薄いブルーで書いてある6つの枠は、これまで富士川町で行いました。子育て支援事業として私が就任してから実現したのが、この濃い真ん中のブルーの5つです。

病児病後保育をご紹介しました。産後ママにお弁当を配達する、産後鬱などを防止するために訪問してお弁当を渡す。hottosさんとスペースふうさんと一緒に進めています。そして先ほど話したオムツ代の助成、そして保育園の保育料の完全無償化をしました。今年度からは、給食費無料を実施しています。ようやくこれも実現することができました。

今後の目標は、英語力や学力を上げていきたい。できれば中2で英検2級を取れるように英語力を上げていきたい。国際交流ということで、実はフィリピンのラブラブ市に行ってきた。その件で私が公用車を使って行ったという新聞記事が出ました。実はフィリピンのラブラブ市はセブ島の空港があるリゾート地で、語学留学のメッカです。そして日本人がそこで語学を勉強し、帰ってくる。その市長に色々な人脈を使って会ってきました。

そこにALTを連れてくる。ALTは国から補助金が出ます。町の財政に関わらず、ALTを連れてきて英語学習ができて自治体がいつかあるのです。富士川町と同じような規模の町です。自治体があって、その可能性を繋ぐために行っていました。そして今、事務レベルで交流を始めています。

今、国際交流は進んでいます。うまくいけばここから英語の講師を連れてきて、そしてオンラインでその英語の勉強をしたり、そういう何よりも子供たちが向こうの子供たちと対話することによって世界が広がります。

国際交流という世界が広がっていく、そして国際社会で羽ばたいていく人材が富士川町から出ていく。私もラブラブ市長が招待をしてくれて話をしました。ですが英語が喋れなくて、通訳と先方とが対談をするのですが、冗談を言って笑うタイミングが常にある、本当に国際社会で取り残されるってこういうことなんだと感じました。

そして一方で、ラブラブ市は富士川町と姉妹都市の大洗町とも姉妹都市を結んでいまして、大洗町にラブラブ市が表敬訪問に行った際に、大洗町の中学生は英語が話せるので、全部アテンドして案内をしたそうです。國井町長から動画を見せてもらって、中学生が全部アテンドをして、催し物やダンスなどを見せて、案内している姿に同じような規模の自治体でこれだけの差が開くのかと思いました。少し余分な話をしすぎました。

もう一つは、働く環境を拡充したい短時間労働です。これはお母さん方のみならず、全ての方が短時間労働で、この時間は少し空いているから働きたいという方々に労働環境を提供していく。一方で企業の道の駅富士川も、1時間でも2時間でもいいから働く人がいないかと、今は派遣会社から人を呼び込んで、派遣料を払って回しています。人材不足なのでそういう事業者がたくさんあると思って1時間でも2時間でもいいから手を貸してもらいたい。そういうマッチングをどうやってやっていくかを研究していきたい。これも先進事例があります。岡山県の奈義町という町は、うまくこれをやって子育て支援に力を入れてやっています。また、有名な兵庫県明石市は子育て支援 No.1 の事例も短時間労働をうまく取り入れています。

【P18】

富士川中学校ができました。新たな中学校、鯉沢中学校と増穂中学校の伝統と歴史をしっかりと引き継いだ中学校が動き出しました。私も夜、町民の皆さんと話をしました。それ以外に無作為抽出アンケート調査を行いました。

様々な議論を積み上げて、新しい中学校ができました。4月から動いています。過日新聞報道等にあつたとおり開校式が行われました。同じ制服で、同じ校歌を、両中学校の子供たちが一斉に歌っています。

この中で3年生と2年生は制服を買ったばかりです。昨年それぞれの中学校で1年生だった子達は、また新しい制服を買わないといけないということで負担が多いことが指摘されました。鯉沢中は鯉沢中の制服、増穂中は増穂中の制服のままスタートしようという議論もありましたが、教育委員会とも話をして、制服が別ということではじめの温床にもなるのではないかと、旧学校の垣根になるのではないかと。制服が違うと意識も変わってくる。ということで2年生3年生には新しい制服の補助金を出させていただきました。

そして新たな中学校として一体感を持ち、スタートしているということで非常に感動しているところです。新中学校に関しては、細かい部分でいろいろご意見もあると思いますので、意見交換を行いながら、一緒にいい学校を作っていきたいと思っています。

【P19】

次は、福祉についてです。高齢者福祉、これも人に投資していくという意味でいろいろな政策を展開しています。担当に話をして、子育て支援みたいに他の自治体ではやっているのに、富士川町でやっていない支援はあるかと聞いたところ、富士川町はほぼフルスペックで支援を前進的に行っています。歴史的に介護福祉は力が入っています。でもその状況にいろいろな面があります。担当にそのメニューの資料を出してくれと話したら、す

ごくたくさんのメニューがあるんですね。この様々なメニューをどこに話をしたらよいかわからない、というのが実態なんですよ。

包括支援センターというのがあるんですが、ここはワンストップで動かしていく仕組みになっています。ここで皆さんに、包括支援センターを知っていた方は○、知らなかった方は×を挙げてください。ありがとうございます。半分半分ですね。行政はフルスペックであり、ここに話をしてくれればいいというのはわかっているけど、やっぱり町民の皆さんは知らない。知らなくて当たり前なんですよ。介護というのは初めての経験ですし、出産と一緒に時期というか、そのときにならないと直面しない。そのときになったらどうしたらいいのか。

【P20】

でもこの包括支援センターとにかくお話をしに行ってもらえれば、ワンストップで相談に乗ってくれる仕組みができています。ぜひ皆さん、何か困ったことがあれば包括支援センターを活用していただければと思います。

そうはいつでも、包括支援センターをもっと皆さんにわかりやすくお伝えしないとけない。

例えば、両親が介護状態になりました。共働き世帯でどちらかが辞めて介護をしなきゃいけない。かつては親戚や兄弟が多かったのが、みんなで見ていたけれど、なかなか核家族化になっていてその家でしか介護状態の方を見るができないのが今の状況です。そして、例えば介護認定いくつと決まるまでに疲弊してしまう。毎日が戦場の中で疲弊してしまうこのタイムラグをどうやって縮めていくか。そういう状態になったときに、どういうふうに寄り添って相談できるか。家で看たいという方は、家で看る。そして施設とかプロに任せたい方は、プロにスムーズに任せられる介護待機者がゼロになるようにそういう状態をさらに、さらに進めて作っていきたい。

そして町民の皆さんが、自分がこうしたいという、いわゆる服のオーダーメイドと同じように、私はこういう生き方だからこういうふうにした、この家はこうだからこうしたい、というオーダーメイドの状態を作っていきたいと思っています。ということで、ぜひ包括支援センターをご活用ください。

【P21】

最後になります。リバーサイドパーク構想ということで出させていただきました。12 ページです。この絵を見ていただければ分かります。『夢』です。これを何とか実現したい。リバーサイドパークはお金をかけてやるつもりは一切ありません。何億というお金はかけておりません。

ただあるものをうまく利用していくということで、今のドッグランができました。これは、親水公園の北側の敷地が空いていて、草がたくさんになっていました。そこをただフェンスで囲っただけで、これも企業版ふるさと納税で、皆さんからの税金は一切使わず作りました。人と動物の共生社会、そしてペットツーリズムは、盛んに全国的にやっています。

犬を飼っている方々は、自分のキャンピングカーなどで一緒に出掛けたり散歩をしたりして、お金を持ってる方がたくさんいます。そういう方々はペットフレンドリーな町によって、自分のペットをしっかりと遊ばせたり、一緒に飲食ができる町などを探しています。そして地域の方々も昔は放し飼いもあったのですが、今はリードでつないでいるので、犬を放して走らせてあげたいという思いもあるかと思います。そこで色々なコミュニティもできています。交流の場になってきています。

そしてこのドッグランと、ペットフレンドリーのまちづくりを打ち出したところ、道の駅富士川で様々なペット関連の催し物が展開されています。ディスクドッグ大会や犬と一緒にダンスしたり、全国各地でそういった大会が行われていて、その大会が富士川町で開催されました。

そして日本犬の品評会を年に2回行いました。リタイアした盲導犬の団体がイベントを行うようになってきました。まんまるマルシェというイベントで様々な動物関連のイベントを行っています。

【P23】

そして、スケボーパークです。これも展開しています。スケートボードはオリンピック競技にもなっています。滑る環境が県内にはなかなかありません。もう一つは、子供たちの成長にはスケボーはすごく良くて、バランス感覚や神経系、体幹を鍛えるのにすごく良い。それも幼少の頃の子供たちの基礎を作るには、ちょうどいいスポーツだと聞いています。

スキヤモンの成長曲線があり、筋肉系と、神経系と、あとホルモンの関係などそういった成長曲線があるのですが、筋肉は20歳に向かってだんだん強くなり、中学生や高校生でスピードや持久力など大きな筋力がそれからつく。神経系やバランスとかすばしっこさは幼少期でしか作れないのです。ゴールデンエイジといいまして、保育園の年長さんぐらいから小学校低学年で完全にできてしまうということで、スケボーパークを作りたいです。

最初はベタ打ちのコンクリートの計画でした。そもそもこのグラウンドに自衛隊や災害時に補給するためのコンクリートだけ打とうというエリアがありました。コンクリートだけ打っても公園の利活用方法もない、なにか活用したい。もったいない、コンクリートが打ってあるんだったら、ここにセッションという移動式のものをつければスケボーパークになる。甲府や中心街ではもう滑る場所がなく、競技者人口は増えている。プロの世界大会もあったり、様々なイベントがあったり、こういうことをスケボーパークができれば、イベントも開催できます。

そしてこれもあまりお金をかけずに、ということで展開をしています。これが何億円とかかる事業であれば、怒られても仕方ないです。ですが、セッションを設置すればいいだけなので。いきいきスポーツ公園には、健康遊具も実はできています。同じぐらいの規模の予算でできる。報道をうまく使って地域の皆さんを盛り上げるために、ドッグランもただ囲っただけですが、報道をうまく使って地域を盛り上げていきたいと思っています。

【P22】

最後は空飛ぶ車です。ヘリポートの計画です。ここも河川敷の草が生い茂って使っていない場所がありました。ちょうど親水公園といきいきスポーツ公園の間で、リバーサイドの全体の横の線を繋いでいくために、この草

が生い茂っている河川敷よりも一段高い未利用地をしっかりと整備をしてヘリポートを作る。これも国交省がほとんどやってくれました。今の段階で、平らにしてくれてそれで一部草刈りをして、国交省に整備していただいて場外離発着場ということで、国交省の認可をいただいたところです。

何でこんなヘリポートをやろうとしたか、実はこれから空の時代になっていきます。今の大阪万博でもここで空飛ぶ自動車の実証実験、展示が行われています。世界的にはもう認可されてる機体もあります。アメリカなんかはどんどん飛んでいる。そして噂によると、ロサンゼルスオリンピックを契機にそこから先は法整備も含めて、その後の自動車の環境が整ってくるということを聞いています。

山梨県自体もワーキンググループができています。ぱっと空から山梨県地図を見たときに、県内にハブポートといひまして、そのハブとなる空港といひますか、地点というのは1ヶ所しかできないのです。1ヶ所だけ。これは法整備ができてそしてヨーイドンでやったときに、甲府市や甲斐市など都市部にやはりできてしまうわけです。

しかし、機が熟していないうちに先に手を挙げて富士川町に引っ張っていきたい。空の中心も。という思いでヘリポート構想に手を伸ばしました。

かつてはこの地域は、舟運で栄えました。そのときのことを考えてみてください。

旬で栄えた鰍沢橋、青柳橋があった。黒沢もありました。そのときの政治に携わる人間は、きっと自分のところに河岸を引っ張ってくるための努力をしたと思うのです。何もしなければ河岸なんかできない。そういう当時の政治的判断の中で我々は、素晴らしい歴史と、文化や様々なものを表示していただいた。次の世代に向けてこれが本当に身になるかどうかかわからないですが、その仕掛けをしなければいけない。

そして、今の富士川町の規模であとから手を挙げたって、富士川町が山梨県で唯一のヘリポートというのはなかなか難しい。なので先手を打ってやっていきたい。歴史は繰り返すと思います。そして、空路の時代になってきます。そのときの時代のために、今からつばをつけておきたいということです。

増穂ICができました。あれも中部横断道ができて、何もなければ増穂ICができたかどうか分かりません。当時の政治に携わる人が動いて、富士川町にICを引っ張ってこよう、道の駅構想をしよう、そのときにやったからこそICができて道の駅富士川ができて周辺が賑わっている。同じようなことを次の世代に向けて仕掛けていきたい。それがこのヘリポート構想です。将来山梨県の中心となり、また改めて中心となる地域になるように、これから仕掛けていきたいと思っています。

これからは、様々な地域課題やまたこの内容の中の不明な部分でもいいので、皆さんとご相談をしていきたいと思っています。以上で説明を終了とさせていただきます。